

そして勉強するものを點取り蟲とかかまう生徒でも口先ばかりで其實は大いに勉強して居る人がある又口でも云ひ實際にもよく勉強せない人の中で或一部の人即ち一人か二人かをのぞいては實力のある人は少ない様に思ふのである。

それから次ぎは試験勉強である之に對して生徒達は口では不可々々と云ひ乍ら隨分夜遅くまで勉強するのである又先生達でも試験勉強は一時的のものでいかんくとおつしやるが成程學校すんで歸宅又は歸舍すれば運動も何もせず唯だ机に食ひつき夜までてつすると云ふ様な事は衛生上害もあり却つて記憶を悪するので悪いが或程度までは試験勉強は良いのである。

何故ならば生徒は之がために大に辛苦して勉強して其全部を得ずとも其幾分は得て所謂實力となるのであると思ふ。之はうねばれの様であるが實際であるのだ自分は初めから甚しく同級生中より點取り蟲點取り虫と云はれたが何もかまふものかと思つて居た故か年々席順も下らず解らぬ事も段々わかる様になつて來た。

次ぎは意志である忍耐であるのだ、此意志強に忍耐あると云ふ事は何事をするに缺くべからざる必要な事である。然るに多くは此反対で意志薄弱の者が多いためである自分も其例に漏れない一人である即ち自分學年の初め學期の初めは常に其れ以前よりはもツと今度は勉強して好結果を得ん又一方には大いに運動して身體を強健に精神を堅固にせんと思ひ始めは幾分やるがしばらくすれば少しの事が造作になりうるさく思

はれて遂に最初の此良計畫を破るのが多かつたのである否全くそうであつたのであるそれで今から考へて見ればあの時にもう一寸辛棒してやつたらもつと力がついて物事が解るようになつたであらうもつと身体が強健になり成績がよくなつたであらう惜しい事であるもう一度あそぶ時代になつたらなあと思ふ事は切なのである、殊に此校友會の雑誌に自分の意見を出し自分の文歌を出さうと思つたのは二年級の時であつた原稿募集の廣告が出る度に今度は一つ奮發して何か書いて出さうと思ふがいつも思ふだけつい造作になり爲めに出したことはなかつた。只だ第二學期(五年級)の出句と此所にのべる愚感のみである。思ふた時に奮發して出したら幾分かは此作文下手をましにしたであらう思ふて居るが後悔先にたゞすで不可なのである。

此れ皆自分の意志薄弱から來たものである又何でも此通りである、此れは誰でも同じ事であるから未だ先の長い一年級や二年級の人等は之を思つて意志を堅固にして上に述べし自分のした事の反対を行つたらば少しは其人達の爲めになるであらう。

次ぎは運動部の事であるこう云へば弊があるかも知らぬが兎に角運動の事である、此中で遺憾であると思ふたのは次の様な事である。即ち其運動やる人が比較的少いそしてやる人とても一体的の人が多い、此れでは面白味も少い又ひざう身體の爲めにもあまり役に立つぬ何も運動しなくてはいかぬとてひざく即ち過激にやらなくとも良いので適當に之をつゝけて行けば良いのである。今運動部の様子を見るにわづかに

唯選手の人々によつて其運動部が存じて居るゝ云ふ事が維持されて居るのである。

其中で体操科に屬する機械体操等は別として短艇部、武術部はまだが庭球、野球部と來たらそれはひどい。夫は設備の不完全な爲もあるが又忌憚なく云へば其衝にあたる人即役員所謂理事等が不熱心なの又は自分等即其選手のみがよければ良いと思ふて局外生即一般生徒に對し萬事につきて充分世話をせず、頗る冷淡であつて隨て其盛にやらんとするのを歓迎すると云ふ事がないため又其當事者中意見を異にするもの等があるため其部の進歩發展を抑制するのではないかと思のである。

今之我校友會運動界を見るに頗る慨歎に堪えぬものがある、即野球にしても庭球にしても近頃てんこ振はないのである、今少し心ある人があるならばもつて發展其名譽を擧げる事が出來ると思ふ、それで當事者は充分其責任を以て其職務をつくして一般生徒に之を獎勵し又一般生徒ももつて進で運動を重視して此が爲を思ひそして充分之が爲に盡して又一方學校も充分運動部を重要視し保護して兩々相待て我運動界の爲め盡して或物は昔日の榮譽を回復尙一層其光輝を燐たらしめ又或物は之を進で其名を天下に歌れるようにせられん事は實に我々の切望して止まない所なのである。

今一つは生徒相互間の事である生徒間には往々ありがちな心得違ひして居る者がある中には成績の良なるものは成績の良いものゝみに交り他の者に對しては之を相手にせないようなものが良く見受けらる現には之がある又家が充分で金まはりがよいとか又は其感情等の通じた者又は少しまじめを缺いたもの同志が一

部(一團)をなして貧生又は眞面目の生徒を蔑視して何事と雖も相手にせんそれが爲め馬鹿に氣取たり、無いものも一廉金が有りそうな風をしたり。又眞面目なのがあはらしいとて之を缺いてまで其一部の仲間に入るものが有り。又そうでなくともいやに氣がひがみ出して生徒間の意志又は其一部と他の一部の生徒の氣が合はないため互に敵視したりして遂には其が爆發して一騒動即ち爭鬭等が起つて大に其生徒に對し害が甚しいのである。故に生徒たるものは友は擇ばなければならぬが學校内でそうひざく分へだてせなくと相互に和し意を相通せしめて小言ができるないようにしたいものであるからして四年級以下の校友達は相謀り相行れて教師達にもよく隨ひ共に共に我校風を擧げられんことを偏へに願ふ所である。

今や我彦根中學校は新築はゝ成近く落成して之に移らんとの事であるが遺憾な事には我々は此あたらしい校舎には入ることは出きないのである、が然し若し入らなければならぬ様になれば之又面目ない話である然し今我々が學びつゝある校舎と云ふものは内の設備は不完全であるかも知らぬ否今不完全であらうが然し今日斯様な立派な煙突を有つた白亞塗の中學校が金龜城の様な立派な城側に巍然として二十餘年間たつてある様なのは天下にないであらうそなう思へばなつかしく鼻高くなるのである。未だある我々は今上陛下の皇太子殿下でおはした時分二度も彦根へ行啓あらせられ最初には此光榮ある千歳一遇の鶴駕を此古い校舎で御迎へしたのである。こう考れば余程此校舎と相離れ憎くなるが此等として兎に角設備完全な校舎で授業を受ける事のできないのは一大痛恨事たるをまぬがれぬある、だからして尙一層四年級以

下の生徒諸士に願ひ又祈らねはならないのである。

それは外ではない此完全なる校舎に入て充分勉強して好成績をおさめ我校の名譽回復を期せられんことをである。

まだ述べたい事は山程あるが身は多忙であり又雑誌にも制限もあるだらうから此れで切り上げよう。終にのぞんでながくしく面白くもないことを、くどく愚意をのべた罪は此所に深く謝するのである。(をはり)

櫻島火山よりの來信

第五學年 珠 玖 義 造

一筆啓上仕り候、時下嚴寒の砌りに御座候處諸君には何の御變りも無く日々御奔走の由欣賀奉り候。扱て小生先般は持て生れた持病の突然の勃發にて罪科なき人間諸君に飛んだ災害を及ぼし奉り何とも早や御詫び申上ぐる次第も無之、只管恐懼惜く所を知らず目下謹慎致し居り候。何れ天帝の誅罰を蒙るは必然と覺悟仕り候へ共先以て不束の段平に御容赦被下度伏して御願申上候。

皆々様御承知の如く小生儀は櫻島火山の名稱をたまはり日夜活動致し居り候、而して霧島、阿蘇の如きは小生と血族の關係も有之既に故人となり居る者を合し候へば日本國に在住仕る同族實に多數に上り申す可

く伊太利に繼いで世界第二位の由承り居り候。

小生等も平常は別段諸君に害を釈し奉るが如き事は無之候へ共悲しいかな小生等同族共通の持病之有り人間諸君にて候ふならば喰ひ過ぎとでも申上ぐ可く、突然多量の排泄物を一圓に噴出仕ること間々有之候。之れ諸君のいたく忌み怖れ給ふ處にして「人力は自然に叶はず」とかや宣ひ誰一人小生等に近付き給ふなく稀れに御親切にも訪れ下さると思へば心細しや世をはかなみ給ふ厭世者の方々に候。

さて小生等發病の際は必ず豫め前以て御一同様に此旨御報知申上ぐる慣ひに御座候、然るに先般は非常の急病にて御一報申上ぐる暇之無く候て小生身の周りに御在住の方々に思はぬ禍を及ぼし奉り殊に被害の諸君が御貧窮の由承り候ては身も心も張り裂けん思ひ致し候、之唯小生不覺の致す所惡からず御容赦の程願上候。

猶亦小生病中は令名世に轟く専門醫大森博士態々東都より御來診下され小生病中の摸様をくわしく御診察の上病後の注意迄も懇ろに御話し被下御親切の程しみく鈍き小生の心にも深く銘し、生々世々大恩は決して忘却仕らず候。殊に近くは米國ハワイの専門家某氏萬里の波濤を越えて態々御來朝小生の病狀を御診察下され併せて同族一同を御慰問下さる由、身に餘る光榮に浴し一代の面目之に過ぎずと感泣仕り候、一度病に惱さるれば斯くの如く舶來名士の方々の御診察を辱うする小生の身の上何と云ふ幸福なる運命なるかと蔭ながら嬉し涙にむせび居る次第に御座候。

幸に病後の経過事の外良好にて此分にて餘病無之候は、程なく全快仕るべく候間何卒御休心被下度候。小生此後は一意專心養生仕り決して斯る災害を及ぼさざる様同族相戒め綿密に注意致す可く候間御心配なく倍舊の御交際を希望致し候。

先是畧儀ながら書面にて御詫申上候、尙此旨貴殿より宜しく御一統様へ御傳言被下度願ひ上候 早々

探梅の記

第五學年 勝馬繁藏

夫れ梅の性たるや、嚴寒の交、朔風骨に徹し、大雪錆を布くに當りて、瘦骨稜々として、能く衆芳の魁を占め幽馥郁々たり、花影疎々たり。而して凜乎として犯すべからざるの氣と烈乎として奪ふべからざるの風と、具に備ふるもの有り。宜なり。騒客韵士の愛して措かざるや。

余も亦酷だ梅花を愛す。時是れ早春、殘寒尙ほ料峭として、後苑未だ一枝の花を見ずと雖も、郊外豈に一朶の笑を呈するもの無からんやと。

偶々閑を偷んで筇を某處に曳く。已に至れば、絕崖峭立僅かに一徑を通す。乃ち崎嶇盤崛して上り、松蔭を穿ちて一憩すれば、忽ち暗香颯然として身を襲ふ。則ち起て四顧すれば、前程數十步松柏の間に、果して梅樹の參差點綴せるを見る。

喜び至れば老幹幾樹、青苔以て之を覆ひ、紆餘偃蹇として、呀然半身既に朽ち、而して舊蓄の綻るもの漸く三分、其の清姿楚々たり。濃香郁々たり。加ふるに松柏の青々たるもの、淺紅の娟々たるの點在するを以て、又一層の風趣を添ふ。且つ賞し且つ歩めば、豁然として前面に一溪あり。坂路屈曲花間を縫ふて下れば、水頗る清深、兩岸所々に竹林あり。森々として梅花と相映帶す。乃ち巖上に踞して矚望するに、岡巒は巍々として高く、幽谷は窈窕として深く、轉た妙境に入る。楚々たる花、青々たる竹、峨々たる山、洋洋たる水、一として奇ならざるなく、一として絶ならざるなし。

時に朔風徐に吹き來りて六花紛々、斜照は西に春きて月色朦朧たり。余是に於て呼んで曰く、林甫が月下の美人、雪中の高士と賞したる、亦宜なる哉。

感賞多時、四隣暗澹たり。興未だ盡きずと雖も、愛を割て廬に還る。家人の曰く、梅林を過ぎ来るに非るか。余其の故を問ふに、答へて曰く、衣袂盡く香しこ。則ち殘燈を挑げて之が作を記る。

薄暗い窓

第五學年 大杉友七

噫乎、思ひ出深き此の窓、此の暗薄い二階の窓!!

西向きで中々に太陽の直射を受ける事は出來ぬのに其の上、細い舊式な格子になつてゐる物だから薄暗い

のだ、友達が来て驚くと共に發する語は、

先づ、何だ君、暗い室に居るのだね！

次に、何だ君、舊式な所に居るのだね！

余は是等の歎聲に對し今暫らく辨解せうと思ふ、殊に日曜等には、向ひ側にはお日様がきら／＼とさし入つて如何にも氣持よく見えるのに、此の薄暗い窓の下は依然として薄暗い、と思ふと腹が立つ位、從つて空氣の流通も宜しくない。

夏の日に、そろつと日中になると太陽が此の薄暗い窓を格子越しに押しよせて來ると明くなる、然し乍ら是と共にそろつと暑くなる、暑くなる、遂には蒸し暑くてたまらなくなつて來る、殆んどからだが蒸し焼にせられる位になる、是が爲めに實際息苦しい程である。

冬はと云へば一寸降つた雪でさへ、向ひ側には溶けてあとかたもないのに、まだ此方側では残つて居るといふ事實によつて推量が出來る程に寒いと云ふ窓の下。而も此處に我輩が我輩の書齋然として据つて居るのである。今更自白する筈ではないが、僕の勉強室はこゝにあるのだ。其の室の廣さは云へば實に四疊敷である、先頃よく某校友の四疊半錄と云ふのを拜讀したが僕の居室は之より狭い事半纏、而も其内に何が置かれてあるかと云ふに驚く勿れ、長持一、火箱其他行李二、三、此處に余輩は本箱一、机一を並べるだけでも中々に狹さを感じるのである。况んや我がからだ小なりと雖も一人を容れねばならぬのである。誠に狹

苦しい呻吟して居る物ではないか、其の無様なる事言語道斷。讀者は蓋し吾輩の白狀する所を讀むだけで定めし肩がつまる事であらう。

嗚呼我輩は此の如き薄暗い室をあてがはれて以來、爰に五ヶ年間を起居したのである。そんな不服を云ふならばもつと氣の利いた室に代つたらと云つて呉れるであらう。然し乍ら是とても余輩はまんざら思はないのではない、けれども例の通りインキ等をこぼす憂があると云ふので宅の人が許して呉れないのである、あゝ思ひ出の深い此の窓の下、然し乍ら我輩は敢て此處に不服を告白して鬱を晴らさんとするのではない寧ろ余輩は諸君に誇るのである、あゝ此の窓の下に五ヶ年間を打ち過して辭書と首引した事もあれど、幸なる哉近眼にもならずすむ事が出來たかあゝ有難い事。昔の人にも螢を以て燈にかへたためしあり雪もて讀書したと云ふ人もある、總じて苦みの在る所樂み自ら其内に在りで、少くとも、何時かは樂みを産む物であるそなが小生が此の幽室に五ヶ年を暮したと云ふ事がいつかは談片として見たいものである。殊に薄暗い此の窓の下それも夜になれば辭して下に下りなくてはならぬのである、而して店に幸にして一箇の電燈があるので友させなくてはならぬのである。然し是は誠に始終感謝に堪へぬ次第、十燭光が殆んど我輩に一任せられてあるのだもの。けれども亦但書がある、と云ふのは元來店と云ふ所は人の出入する所なので實際を云へば勉強には不適切な所だらうと思ふ、殊に我輩の寓居の如きは舊弊なので閉口する時もよくある。

然し是は尙構はぬとして、此處にばあさん驚く勿れ今年七十一の高齢に達したればあさんが、毎晩殆んどかゝさず電燈のシャーヤーを得んが爲に余輩の横に座を占められる、此人中々の氣張り手で晝は日方よき座敷にお針をする、夜に電燈の下が明いと云つて得意でやつて来る、其上に小生を以て顧問に備へらるゝのである。則ち毎晩針のみ、づつなぎを一任せられてるのである。

あゝ是が一ト晩や二タ晩の事であらうか、五ヶ年勤續の事である。老者に對して之は當然であらうが然し是が爲めに勉強を妨げらるゝ事蓋し少くないであらうと思ふ。

殊に試験の時等には頭がむしやすくして居るものだから何となく癪に障る事少くないのである。彼等斟酌すると云ふ事を知らぬのも甚だしいと云ふべしと思ふ。そして何故毎晩下りなくてはならぬと云ふに是は二階の屋根が低い者だから火災等の恐あるを口實として、遂に吾輩が五ヶ年間ランブを點するだけの信用を得なかつたのである。殊に電燈がつく前迄と云ふ物は暗いランブが店に一つ、此處で勉強が一時間も比較的遅くなると例の婆さん忘れもせぬ「油がへる！」との雷を落す、余輩はよく、マーマーリングしたものだ。

噫呼思ひ出の深い窓の下、電燈の下余輩は熟々思ひ浮べると涙がほろうとする、あれやこれやが湧いて出るのである。

此の窓あつて此の身あり、此の身あつて此の燈があるのであらう。我輩は實に是等と密接なる關係があるのである。然るに此の身は今や旬日にして彦根の地を去るべき物である、而も是等は相伴ふべき種類の物ではないのである。則ち是非なく此地に残すべき物である。今迄我身に接近して居つた此の窓と、此の電燈とに袂別せねばならんか？あゝ淋しい様な感がする!!

余輩が又何處かで机により、孤燈を友とする時があるならば、必ずや此の五ヶ年を回想する事であらう。少くとも彦根の地を踏む時は必ず／＼汝を追想する。嗚呼思ひ出深き薄暗の窓！、汝は能くも心棒強く我輩を容れて呉れた。あゝ情篤き電燈よ汝は我輩のためによく友となつて呉れた。共にその親切は忘れぬぞ我輩はこゝに汝等を紹介して我輩の紀念とする。只感激の涙數行。（終り）

雜吟

山茶花の家に客あり雨の夜
霜の庭短き草を雛つゝく
温室の屋根にたばしる霰かな
橋渡る下駄の響きや冬の月

生徒皆な去りし校舎や眠る山
兵糧を運ぶ鐵車や霞れ降る
彈き初めに琴の師匠や福壽草
歌かるた妹の友兄の友
白梅や土橋渡れば小祠あり

新年雜吟

若水や汲みて清めん去年の庵
空紅う金波躍らす初日の出
風風いで町も静かに初日哉
初日浴びて淡路に通ふ小舟かな
野社の一本杉に初日かな
神垣や一千年の杉に初日の出
寒梅の南枝ふくらむ初日かな
初日集ひ杉の梢や神路山

思ひ出

第三學年

仙波

健

今は十年の其の昔
私は武藏の山奥の
其又山の又山の
麓の村に居りました

黄金の波が打つと云ふ
稻がスツカリ刈り取られ
山の木の葉が散り敷いて
漸く冬となりました

或朝早く起きますと
畑も林も野も山も
白い白い真白い
雪の真綿で包まれた

猫は炬燵に丸くなり
犬は庭をば駆け廻り
雪やコンコ霰やと
私は歌つて居りました

雀はチユチユと鳴きながら
枝から枝へと飛び廻り
風吹く度に木の雪は
バサバサ音して落ちました

私の家は村はづれ
隣りの大きな竹藪を
窓押し開けて眺めると
竹は曲つて居りました

雪がそんなに重いなら
少し落して上げましょと

長い長い竿持つて
拂ひ落してやりました

けれども竹はいつまでも
曲つた儘で起きません
雪が逃げたら起るかと
雪の逃げるを待ちました

三ツ程寝た其のあした
雪は逃げて行きました
けれ共竹は起きません
首うなだれて居ります

其うなだれた有様は
今でも私の胸にある
窓にもたれた有様は
今でも決して忘れません

(終)

梅

第一學年 垣 見 甚 一 郎

百花の魁にして、第一の春を占むるは梅なり。梅は薔薇科に属する落葉の喬木にして葉は橢圓形或は卵形にして尖り花は寒氣雪風を凌ぎて二三月頃に嫩葉の芽に先だちて香の袋を破り暗香浮動す色は紅若くは白なり。

花瓣は概ね單へにして五個を備へ又八重あり花冠の外部に萼片五枚ありて茶褐色を帶び花は麗しくはないけれど其の馨復郁として恰も蘭室に入るが如く微風過ぐれば清香骨に透り闇まで匂ふ結實に至りては梅干となし永久に腐敗することなし故に戰時等の副食物として最も重きを置かる又藥用染料にも供せらる種類は極めて多く殆んど枚舉するに遑あらず就中豐後梅、八房、紅梅、枝垂梅は名に負ふものなり。而して野に在ても山に在りても小川の頭にありても荒磯の隈に在りても瘠烟貌可りの小社等も常は目にいぶせく心にあかぬものも此の木一本ありて枝枝交叉し咲き居れば芳香沸々して袴袖を襲ひ人はゆかしさ様ぞと眺めらる又我が國の梅の名所としては大和月ヶ瀬、武藏の薄田及び杉田、山城の日野、水戸公園の梅は古今人の能く熟知せる所にして此處に至れば宛として佳境に在ると覺ゆとぞ故に屢々詩歌に題せらる例へば徳高く心清き人の如何なる處にあれども其の居る所の俗には移されずして却りて其の俗をかぶるが如し古書に曰く

讀諸葛武侯出師表、不墮涙者其人必不忠。讀陳令伯陳情表不墮涙者、其人必不孝。讀韓文公祭十二郎文不墮涙者、其人必不友。實に此花好まざるものは奴とするにも堪へざらん。

古歌に云はすや

紅のこぞめの梅の花見れば

まだ春あさき色としもなし。

梅が香は今朝こそ風に匂ひくれ

昨日は雪にあざむかれけり。

又管原道眞公梅を愛して曰く。

こち吹かば香おこせよ梅の花

主なしどて春を忘るな。

鎌倉大臣涕涙して詠じて曰く

出で行かば主なき宿となりぬとも

軒端の梅よ吾を忘るな。

(完)



通
信

東京支部通信

校友 文室重敏

列席者姓名（不順）

船塚芳次郎 大久保藤吾

林半藏 伊藤利三郎

廣瀬助一郎

森莊三郎（大學院） 伊藤竹次郎（帝大法）

橋良貫（帝大法） 宮野專太郎（同）

竹村伍三郎（同） 外村省三（同）

高橋貞太郎（帝大工） 小林茂（高商）

福永淳三（高商） 吉井專三（農大實）

藤野清太郎（高商） 文室重敏（帝大法）

しき袂を分つた。

次回の幹事を左の諸君に依嘱す

中村直隆（慈恵院） 宮野專太郎（帝大）

中村他家次郎（早大） 竹村伍三郎（同）

中村吉三（慶大） 高橋貞太郎（同）

杉本桂三（一高） 文室重敏（同）

彦根中學校學友會

謹啓

吾等、今日此處に會する者、廿有餘名、慕しき母校の門を辭してより多きは五年餘、少きも早一年の月日を過し申し候。その間、花の咲く時、月の清き折々。多年教へを受けし諸先生の御恩、さては、親しき同窓諸君が厚き御友誼は、忘れむとするも忘れ難くして、夢魂飛んで金龜城頭、白堊の母校の邊を、屢々低回致候。實に忘れ難きは故國湖國四時の風情。まして瞻吹に雪消えて、比良比叡の峯青く、春風既に江鄉に入りし今日此の頃。廣慈庵の花は紅に、大洞の水は綠ならむと

遠察致され候へど、奈何せん、御地を距る事、百里の東京にありては思ふ儘にその美しさ自然に接する事を得ず、誠に殘念至極に御座候。されどせめては、嘗つて同じく彦陽の地に學び、等しく龜甲白線の制帽を戴きし在京の同窓生、相會し中學時代の樂しかりし事とも語り合ひて、此の望郷思慕の情を盡くすと共に相互の舊交を温め、引いては今後新しく上京せらるゝ諸君の爲にも計り、相互に助け合はむとの目的にて、一月十八日此處（神田小川町ときは）に相會せる次第に候遺憾にも當夜は夕暮より降雨にて、歩行稍困難なりしかど、雨を衝き泥濘を踏んで來る熱心の諸君多く、仲々の盛會にて、開會致せしは午後三時頃夫より各自、胸襟を開いて中學時代の昔にかへり、快談快語して夜の更くるをも知らず、ニコライの鐘に驚きて互に再會を期しながら惜しき袂を分ちしは、十時過ぎにて候ひ此の夜の餘興中、某君の思ひ掛けなき美音美聲、さては某々君の巧なる隱藝等、痛快無双なる數々、明

廿一回卒業生

山田 常(早大)

池内貞三(東齒醫專)

河端虎造(慶應)

廿二回卒業生

小野龍一(早大)

塚田四郎(慈惠院)

中濱顯明(早大)

禿子諦成(早大)

小林茂(高商)

野々山玄朝(日齒醫專)

廿三回卒業生

吉井専造(帝大實)

梅本惣助(早大)

田邊重之(東洋協會)

廿五回卒業生

廣野經三(日齒醫專)

塚本龜助(早大)

中村直隆(慈惠醫專)

廿五回卒業生

大管市右衛門(高工)

太田儀三郎(日齒醫專)

加藤悟三(明大)

に申上度は山々なれど、諸君の御遠慮に從ひて、此には記さる事といたし候。又記さんと欲するも我拙なき筆の及ばざれば何とも證方無之候。

金龜城下舊金蘭 今日他郷握手歎

君已吟詩予起舞 一宵傾盡酒杯寬

たゞ、當夜の重なる決議中、是非共在校諸君の御記憶願ひ度は、本會の事務所を麴町區飯田町六丁目廿一番地に設け、在京諸學校に入學御希望の諸君にして、當事務所へ御問合の節は、出來得るだけの盡力致すべく候に付、御遠慮なく御一報被下度候。

當日の出席者及び賛成者左の如し。

十九回卒業生

中村吉藏(慶應)

清水清次郎(實業)

横田啓三(慈惠醫專)

二十回卒業生

竹村伍三郎(帝大)

下郷健三(實業)

加藤正擴(帝大)

小林繁三(實業)

る代りに、皆で一緒に面白く語りながら、夕食してお互に訪問の時間を節約し、又た、お互に遭ふ機會を多くしたらよからうと云ふに止るのである。

赤門彦中會。此の様な名は今初めて校友會誌上に現はれるのである。私は此の會、否な集りに就て報告、説明するの榮譽を有する。

我が校友會東京支部は毎年例會を開いて、部員等は此の樂しく愉快なる日をあこがれ、心待ちして居る。

此の十月二十日にも、清風亭であつた。中々盛會であつた。然し一年に一回や二回では或は丁度其の時に用事があつて、結局會に出席する事が出来ないと云ふやうな事が屢々ある事と思ふ。と云ふて、此の會も度々開く事は中々出來さうにない。そこで此の校友會東京支部とは、全く別で、現に只今大學に居るものだけがせて月に一回づゝなりと互に集り合ふて、面白く有益に話したら何様だらうと云ふ話が出た。勿論その集りと云ふのも極質素に夕食をする、即ち家で夕食をす

法科 森莊三郎(大學院) 伊藤竹二郎(四回生)
橋良貫(四回生) 文室重敏(三回生)

宮野專太郎(二回生) 竹村伍三郎(二回生)

外村省三(一回生)

医科 堀田四郎 高橋貞太郎(一年)

右之内當日出席したのは、森君、文室君、宮野君、竹村君、外村君、市田君及び小生の七人であつた。

ストーブの周りに丸るくなつて、雑談、懷舊談に時

を知らなかつたが、御腹の要求黙し難く、愈々文室君の御話で始まる事になつた。御腹は空いて居るし、話しながらと云ふ調子だから、中々以て豫定だけでは足りない。何時の間にか御代りの交渉の始まる方もあるた。

食事終つて此の會否な集りに付て、色々に話しがあつて、結局此の集りは、名なんか何様でも好いが、假りに、赤門彦中會とつける。そして規則と云ふ様なものは別はない。只、大學に關係のある人々が、毎月一回集つて、面白く有益に話する會にし様と云ふ事に定まつた。そして期日は丁度此日が第一日曜日であつたから、毎月第一日曜の夕と定め、期日變更のない限り別に通知などはしない。それで會費は三十錢まで。然し矢張り世話方の様な者が要ると云ふので、法科では輪番にする事になつて、その指名を森君に委嘱した。で森君は、宮野君を指名された。工科では僕がやる事になつた。

宮野專太郎
高橋貞太郎
當日、村上義一君（大正元年帝大法科卒業。遞信省在勤）杉本桂三君（「高三部」）が來會せらるゝ筈であつたが、餘儀なき御用の爲め、御出でにならなかつたのは殘念であつた。然し田中君の色々面白い御話を承つて、十時過ぎ散會した。

正月は十八日に開く事に決定し、缺席者にのみ、通知する事とした。

因みに、森莊三郎君は保険學研究の爲め、満三ヶ年間佛英獨國へ、留學を命ぜられて、近く發程の途にかかるのであるが、八日の始業式のある時、母校へ御出でになつて御話があつたそうですが、重複を避け此には申上げませぬ。（三年一月十五日）

前にも話した通りであるから、各人は大學を卒業なさつた方で、御存知の方があつたら、可成引き連れて来る事になつた。

それからそれへと、面白い話が出て、先生に叱られた話も出し、先生を手古摺らした話も出る。話はいつ盡きさうにもなかつたが、時間も遅くなるので、次會は十二月七日と定めて散會した。

武藏野を吹き通して來た風は、遠慮會釋もなく、砂煙を巻き上げて、我々に吹きつけたが、四つ角で旋風の如くなつて、スーツと消えた。時は早や十一時頃でもあつたらう。おでん屋に車夫が二人ほど、首つつこんで居つた。

同上第二信

豫定の如く、十二月七日第二扣所で、第二回目の集りが催された。來會者は

田中恒三郎君（海軍中尉。海軍大學在中）
森 莊三郎
文室 重敏



食 堂 訓 話

特別會員 藤川吉次郎

昨年四月舍監を辭して學級監となつた、それで自分の受持ちの生徒ご一堂に集まつて中食を共にするに一齊に食事が済む云ふことはないそれで只茫然と待つて居るのもつまらぬこゝであるから何か此零碎な時間でも有益なことに用ゐる法はあるまいかと思ふて毎食事毎に一語づ、古聖賢の嘉言金言を掲げて話しながら食事をしたのである、之を五十音列に配列して凡そ一ヶ月に一行つ、済せば一年に大約五十音丈は終はる豫定であつたがなか／＼豫定通りには行かなかつた、無論是は食事のみに關係するの格言ではないか、只食堂で話したから之を食堂訓話と云ふ迄である同級生中にも食事を共にせざる生徒もあるから茲に掲ぐることにしたのである。

あ の 部

一、朝にして食はざれば則ち晝にして餓え少にして學ばざれば則ち壯にして惑ふ饑は猶忍ぶべきも惑は奈何ともすべからず。

二、待^テ有^レ餘而濟^ハ人終無^ニ濟^レ人之日○待^テ有^レ暇而讀^レ書必無^ニ讀^レ書之時○

他人の困窮を救はんとなら自己の不足を忍ばざるべからず、常人は足るを知らざれば終に餘りある日はないのである。然るに餘りある日を待つて救はんとするも何の日か餘りある時あらん。又書を讀むに熱心ならば自から其時を作らざるべからず、然るに他の時間を割いて讀書の時間と爲すの熱心なく餘暇あるを待つて書を讀まんとするもの必ず其時を得ざるものなり「なりくに遊ぶ暇はあるものないこまなしとて文よまぬかな」と同様である。

三、新沐^ヲ者必彈冠^ヲ○新浴^ヲ者必振^レ衣^ヲ。

新に頭髪を洗ひ又新に入浴した者は其体軀已に清潔となれば座を蒙むることを恐る故に冠を弾じて塵を除き衣を振ひて埃を去るすべて身を潔くする者は外物の汗を嫌ふものである。

四、過を爲して之を爲さずと言ふは二度の過ちなり。

五、或以^ニ千金^ヲ與^レ人而人不^レ喜或以^テ一言^ヲ使^レ人而人

い結果がくるのである人の知らざる所でも勢一ぱい働いて居れば必ず勉強家勤勉家と云ふ名が昭ばれるのである即ち二宮先生は陰徳は其結果の現はれざる間を陰徳と云はれたのである。

四怒れる時は十まで數へよ、大いに怒れる時は百まで數へよ。

五、醫師も治療することを得ざらば、休養快樂節食の三つを以て之に代ふべし。

六、一犬吠^レ形百犬吠^レ聲一人傳^レ虛萬人傳^レ實。

一疋の大が何物かの形に吠れば衆犬は形を見ざるも其聲を傳へて吠ね人がうそを言へば衆人は之を實証として傳へるのである。

う の 部

一、搏^ツ牛^ヲ之^ア虻^ヲ不可^ミ以^テ破^ル蠅^蟲○

牛が毛の上にさまたたあぶは之を搏ち殺すことが出来るが毛の中に深く入る所の間にしほみは除き去ることが出来難い即ち外からくる敵は防ぎ易いが内にあるの敵は破り難いのである。

二、運命は富を奪ふことを得れども勇氣を奪ふことを得ず。

三、運命に安じて行爲に勇むべし。

死^レ之者誠與不^レ誠故也稽天之潦不^レ能^レ終^レ朝而一綫之留可^ニ以^テ達^レ石者一與^レ不^レ一故也。

多くの金錢を人に惠んでも誠意より出づるに非らざれば人は少しも喜ばず一言の微^シ雖も至誠より出でて人を使役すれば人は喜び感じて死を避けざることはあり又天を浸す程の雨水は一朝も保つ能はずして其痕をさごめされども一線の糸の如きあまたれの水の深く地を穿つて石にまで達するは純一なると純一ならざるとの故である。

い の 部

一、一薰^{クン}一蕕^{イウ}十年尙猶^モ有^レ臭。

薰は香氣ある草で蕕は惡臭のある草である此香草と臭草とを混同して一處に置くと香氣はいつしが去りて臭氣ばかりのこり十年たつても臭氣は依然としてなくならないと云ふことでつまり善は去り易く惡は除き難しこ云ふことである。

二、一時に多くを行はんとする者は遂に一事をも成すこと能はず。

三、有^ニ陰徳^ヲ者必有^ニ陽報^ヲ有^ニ隱^ヒ行^ス者必有^ニ昭名^ヲ。

世間に知らざるやうに施したる徳は必ずあらはなる報がなつてあらはれてくる又隠れたる行ひあるものはいつか世間に知られて必ず其名のあらはるるものである二宮尊徳先生の主義で云ふと人が見ていようがないまいがそんな事に頓着せず學生ならば勉強して置けばいつか必ずよ

四、相^レ馬失^ニ之瘦^ヲ相^レ士失^ニ之貧^ヲ

馬の善悪を鑑識するにたゞ瘦せたるが爲めによい駿馬をつまらの駄馬に間違へ土の質愚を視るに貧者に誤りて俊士を庸夫となすことがあるすべて侮蔑の心を以て視るときは公平を失ひ駿馬も駄馬に劣るが如き感を生じ尙一層甚だしきは富者なれば賢^シとし貧なれば愚^シとなす誤りと云ふべし

五、饑^ヲれば則ち附^ク飽^ハば則ち颶^リ燠^カなれば則ち趨^キ寒ければ則ち棄^フ人情の通患なり。

鷹は饑たる時は人に附きて養はるども既に已に食に十分なるときは中天高く颶り去るが如く人間も亦饑寒に苦しむ時は頭をさげて富者に服従すれば衣食足りて窮せざるに到らば恩徳に負きて離れ去るが常で古今東西に通じたる患なり。

六、噂^ヲすれば影^ガるす。

い の 部

一、益者三友^{トシヲ}損者三友^{トシヲ}友直^ヲ友諒^ヲ友多聞^ヲ益矣。友便辟^ヲ友善柔^ヲ友便佞^ヲ損矣。

これは交りて利益になる友が三種あり損になる友が三種あるのである直き^シは正直にして私なき者を云ひ諒とは信實あるものを云ふ多聞^ヲは博聞の士を云ふなり又便辟^ヲは人の意に迎合し人の惡む所を避くる

が如き正直ならざるものを云ひ善柔さは巧に媚びて誠實なき者便佞とは辯説巧みなるもの聞見の實なきものを云ふ也。

二、燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや。

三、遠水は近火を救はず。

四、得易きものは失ひ易し。

五、猿猴月を取る。

六、越鳥南枝に巢くふ。

れ の 部

一、親を愛する者は敢て人に惡まれず親を敬する者は敢て人に慢られず。

二、教は長すべからず欲は從ふべからず志は滿すべからず樂は極むべからず。

三、己れを助くること能はざる者は他人を助くること能はず。

四、己を恕するの心を以て人を恕せば則ち交を全ふす人を責むるの心を以て己を責めば則ち過ちを寡くす。

行ひて功あるに如かすとの意也。

五、香餌之下。必有死魚重賞之下。必有勇夫

真き餌の下には釣られて死する魚ありよき賞を以て士を誘へば死を顧みざる勇士の出づるものなり。

六、渴不_{スル}飲_{スル}盜泉_{スル}熱不_{スル}息_{スル}惡木陰_{カケ}。

是れは如何なる苦境に陥るも不義を爲さざるに喻ふ。

き の 部

一、金錢に富まんと欲せば先づ注意に富むべし。

二、先_レ義而後_レ利者榮。先_レ利而後_レ義者辱。

三、虛言は自己を陷阱_{カシキ}するものなり虛言は足短し忽ち捕はる虛言は眞實を語るも信せられず虛言は盜賊の始なり。

四、居移_レ氣養移體。

人の居る所は自然に其人の心氣を移し養の如何は其人の体質を變ぜしむるものなり。

五、騒_キ驕_キ之_ヲ跔_ク躅_ヲ不_レ若_ニ駕_マ馬_ノ之_ヲ安_レ歩_一

此語は後傑も躊躇してあらんには庸夫の勇往に劣るに喻ふ。

六、義欲に勝てば則ち昌んに欲義に勝てば則ち亡_レび敬

三、賢人は人の過を見て己れを正しうす。

か の 部

一、蛟龍得_ニ雲雨_ニ終非_ニ池中物_一。

蛟龍は池中に潛伏するも乘すべき雲雨を得ば終に天にのぼりて永く池中に在るものにあらず是は即ち後傑の人は久しう屈するものにあらずして機會を得勢に乗する時は大に雄飛するものなりこの意に喻ふるこなり。

二、巧詐不如拙誠_一。

詐偽の巧みなるよりは誠實の拙なきを可とするの意也。

三、合抱之木生_ニ於毫末_一。九層之臺起_ル於累土_ニ千里之行始_ニ於足下_一。

一かかへもある大木も其初めは毫末の細きより生じ九層の高樓も累土の低きより起り千里の道も一步より始まるそのことなり。

四、高議而不可及_一。不_レ若_ニ卑論之有_レ功_一。

高尚な議論を成しても實行の出來ないことは卑近な議論と雖も實際に

四、歷險乘危。則驥驥不_レ如狐狸。

此語は賢者と雖も其能くせざる所を爲さしむれば愚者に劣るに喻ふ。

五、毛を吹いて小疵を求めず垢を洗ひて知り難きを察せず。

六、涓涓不_レ塞。將_レ爲江河。焚_レ不_レ救。炎炎奈何。

兩葉不_レ去_ス將_レ用_ス斧柯。

此語は小事を忽にすれば大事となり小惡を除き去らざる時は奈何ともしがたき大惡となるべく總て其始めに慎むべきを戒めたるなり。

涓々は小流なり。焚々は小火なり。兩葉は樹木のめばえなり。

この部

一、幸と不幸とは井戸に下げる。二つの釣瓶の如し

二、克己は勝利の最大なるものなり。

三、困難に耐ふる者には困難來らず。困難を怖るゝ者には困難來る。

四、今日に爲すべきを明日に譲るべからず寧ろ明日に爲すべきを今日爲すべし。

五、心を勞する者は人を治め力を勞する者は人に治めらる人に治めらる者は人を食ひ人を治むる者は人には困難來らず。

六、今日に爲すべきを明日に譲るべからず寧ろ明日に爲すべきを今日爲すべし。

七、心を勞する者は人を治め力を勞する者は人に治めらる人に治めらる者は人を食ひ人を治むる者は人には困難來らず。

二耳二眼を人に與へたり。

二、時機を待つべし後るゝ勿れ。時機にあらざれば成功せず。時機は逸すべからず。

三、春風を以て人に接し秋霜を以て自ら肅む。

四、正直なる人は嘗て其正直を悔いたることなし。正直の頭に神やどる。正直は最善の策なり然れども策として正直なるは其人真に正直なるにあらず。

五、小人過てば必ず文る。小人の精神は不幸に遇へば即ち屈伏す。大人の精神は不幸を凌駕して上る。

六、履_レ霜堅氷至。

すでに霜が履むときは日ならずして堅氷の結ぶ時節至るべし是れ小禍萌せば大禍至り小害起らば大害至るべきを戒めたるなり。

すの部

一、末大必折。尾大不_レ掉。

二、以_ニ隨侯之珠_ス彈_ク千仞之雀_シ。

隨侯の珠は極めて貴きものなり雀は極めて賤しきものなり貴重なるものを以て千仞の高きに在る雀を彈するも命中を必ずべからずたゞひ之を得るも益する所少くして失ふ所多きなり。

に食はる。

六、言を多くすること無れ言を多くすれば、敗れ多し

事を多くすること勿れ事を多くすれば患多し。

さの部

一、倉廩實而知禮節。衣食足而知榮辱。

二、歲月逝いて復た歸らず瞬間を失へば是永久に失へるなり。

三、寒きを救ふは裘を重ねるに若くは無く誇を止むるは自ら修むるに若くは莫し。

四、山林の樂みを談する者は未だ必ずしも眞に山林の趣きを得ず名利の談を厭ふ者は未だ必ずしも盡く名利の情を忘れず。

しの部

一、自然は寡言にして見聞を廣くせしめんが爲に一口

五、先_レ則_シ制_レ人。後_レ則_シ爲_ル人所_レ制_ト。

六、破_{ルハ}山中賊_易。破_{ルハ}山中賊_難。

せの部

一、誠實は非難を受くることあるも耻辱を蒙ることなし。誠實は埋まるゝも死することなし。

二、積善之家必有_ズ餘慶。積不善之家必有_ズ餘殃。

三、從_レ善如_レ登從_レ惡如_レ崩。

四、善人者不善人之師。不善人者善人之資。

五、小人之學也。入_ニ乎耳_一出_ニ乎口_一口耳之間四寸耳。

六、聖人不_レ貴_ニ尺之壁_一而重_ニ寸之陰_一。

その部

一、其身正。不_レ令而行。其身不_レ正雖_レ令不_レ從。

二、不知其君○視其所○使不知其子○視其所○友。

時に吾等五學年五十有餘名は敦賀へと練兵見學の爲に

三、愛其人者兼屋上之鳥○憎其人者惡其餘骨○

旅立つ。

其人を愛するときは皆よく見ゆるから其人の屋上に止まる鳥までも愛らしく見ゆ其人を憎む者は其人一人に止まらずして其家に使役せらるゝ餘骨までも惡むに至るなり。

四、その好む所を見てその人を知るべし。

五、咀嚼したるにあらざれば決して書を読み了れりと思ふべからず。

六、其見ざる所を見んと欲せば人の窺はざる所を視其得ざる所を得んと欲せば人の爲ざる所を修む。

(以下續出)

敦賀歩兵第十九聯隊練兵

見學日記（前編）

第五學年生

黃田正に波打たんとし秋氣天地に満ちて愈々涼しく蒼天益々高し。

所前の菊田旅館に晝食す。○時三十分營門に入る面會場の前に整列して稍々待つ程に谷口少尉殿來らる、聞く氏は吾々の先輩にして吾等五年級の入學二三年以前の我校卒業生嘗ては端艇舵手にては八金敷しき人なりきと同氏の案内にて先づ酒保の娛樂室に至り關中佐殿の講演を拜聽す。概略左の如し。

本日諸君は我聯隊見學の爲に態々遠く江州の地より來られ長き隧道を越えてお出でになつたのは深く吾々の満足する所で且又大に歡迎する所でありますが然し別に之と云ふ話もありませんが講話と云はずして先づ大体の軍隊に於ける話を談話としてお話しませう。

軍隊と學校と地方との關係が次第に密接になつて參りました今年八月。炎暑の候私は簡閱點呼に出張しましたが地方の人々も大分軍隊に接近して點呼の參觀者も次第に多くなり從つて又次第に軍隊の事情を知るようになりました學校も今來軍隊の制度、体操等を模擬して又次第に軍隊に接近しつゝあり。諸君の如く軍隊見

學の爲に態々お出で下さる方もあるやうになりまして誠に吾々軍隊の喜ぶ所であります。

軍人は我帝國の干城と云ふべきものであるから、この干城たるべきものが無學では心細ひ故に今諸君の如き中學生が軍隊を參觀せらるゝのは誠に結構な事であるで諸君が軍人になるゝとならないに論なく直接に軍隊に身を置くか間接かによつて皆齊しく軍人であるから軍人の服装器具武器の外部的のもののみならずよく内部の軍人精神の身に籠れる事等は精しく觀察して來て貰いたい。

彦根地方の人には井伊城下の人々であらうが尙武心が盛んである陸軍將校志願者の數も仲々多い又壯丁の人も犬上郡は大正元年に於て一〇六二陸軍士官學校に入るものが二四、他郡坂田八〇〇陸士、幼年に入るものの九、東淺井五〇〇——四に比して遙に勝つて居る。犬上郡には將校志願者の數も隨分多いがその代りに不合格者も仲々にある。私は本年はその將校志願者の試

驗官でしたが滋賀縣にはこの聯隊區では一人もなかつた。これで見ると受験者は大抵中以下よくて十番内外の學才のものが多い中學校でも學校によつて軍人獎勵のものあれば軍人嫌で他の方面を獎勵する等色々ある。

受験者の不合格は勉強法の下手なのか上成績でない人々か或は試験を受けるが下手なのかそれは何れか分らんが兎に角軍人の國家の干城であるからもつと學才のある人々が志願して貰いたいのだ。目下歐州では兵備擴張／＼と八釜敷云つて居る、獨逸はこの頃日本の二三ヶ師團に當る陸軍を益しつゝあると、ロシヤは日露戰爭で海軍が殆んど全滅したので年々一、二三倍の金を投じて海軍を擴張して居る Dread Naught 形の船を澤山作つて居る。

アメリカ合衆國の海軍が八三万噸あても年々二、三億の金を以て海軍擴張に準備して居る。

ロシヤの東洋の兵力は二十二、三ヶ師團あるそして日本

るものである。

かくて外に在りては敵を亡ほし内にありては君に忠なる所以である。

この忠なるものが家庭の教育如何によるのである。父母を尊び兄を敬し弟を愛すこれ誰も學校に行かずとも誰も皆知るところ抑々これ等が忠の初めである親に孝なるものは君に忠である。

この忠孝は學校でも何處でも必要である師弟の關係が親子の關係の如くならざるによりストライキも起る師を敬せないで何ともない様になる亦ん坊の間は親に世話をさせて置ひて自分で少し歩けたりすると自分獨りで大きくなつたように考へるこんな考で學校に居るからチョイト知つて居ると一廉知つたように威張り度くなる校長にも無禮な事を云ふ。先生の惡口を云つても平氣で居られる。然し正眼で見るとストライキは誠に馬鹿なものである。諸君等學生は須らく師を仰がねばならん。諸君よりも先生はすつと賢い然し先生でも人

シベリヤ鐵道は近年に複線になるこの結果は60万の軍隊を東洋に運ぶ事が出來ると云ふ。

日本魂はスラブ魂より上だと云ふけれども大なる兵力ではないか。であるから今後益々良軍隊を要する譯である健全なる優良の軍人を要するのである一騎當千の軍人が必要従つて上等の人々の軍人志願が益々望ましくなつてくる。ロシヤの大軍に負けたのを敵將クロバトキンが日本魂はスラブ魂より優れて居るからだと云ふが、然し衆寡不敵の時もないと云ふのはロシヤの辭こゝが全く日本とロシヤとの違ふ所である。

吾々の劍の切先には無限の力がある一度劍を抜きて指し招けば切先の動くまゝに行動す。即ち兵卒の生死はこの劍の切先にあるかくの如くにてこそ初めて軍人である。軍人組織を爲せるものである軍隊教育を受けた

間だから間違をせぬとは云へぬ。然るを先生が間違つたからとて問題を持ち出す等は以ての外の事だ。苟も諸君を教ふる先生は悪人でない。吾々の劍の切先には無限の力があると齊しく先生の鞭の先には無限の力を有して居るべきである。かくてこそ師弟の間の圓満を計り得るのである。然るに學校によると學生の風儀がどうも面白くない潰れかやつたような變んな帽子を被る。目鏡を掛けた。氷水を飲みに入る。これが增長すると飲食店に入る牛肉屋へ入る。それで先生は街中を眼を白黒させてまるで憲兵の様に是等の者を監守して居る。誠に宜敷ない面白い現象だ。昔は師弟の間は仲々厳しいものだつた。私も此の間を経過したものだ。子弟は伏して叱かられて塾長に教はつたものの入門式と云つて仲々厳なもの今は誓約書で済むがその時分は塾によつては血判を捺したものだ。

それから諸君は明日は實彈射撃をやられるそつだが射撃を初められる時は尙武の觀念を念頭に持つて貰いた

い。單に丸が的に當るを否と論なく敵を打つと見て軍人となつたものとして打つて貰いたい射擊は軍隊教育の重なものゝ一です。戦闘の大部分がこの射撃でこれで敵を大部分脳まして置いて突撃格闘で勝敗を決すのです。

故に射撃は敵を制壓する主要なもので適當な時適當な行動を取つて初めて功を奏するのである。

普通歩兵は三百發を所持して居るが三百發で三百人を殺すのでは未盡で三百丸で五百人も千人も殺さなくてはいけない。でこの射撃に熟達するには勢ひ射撃の趣味及必要を知るを要するのである。

瑞西人は仲々射撃がうまい誰でも鐵砲を持つて村々に射撃場があつて主權者自ら之れを獎勵して居るからである。

それから指揮官の効の切先には無限の力を有して兵卒を自由自在に操つて曩に謂つたが兵卒がこの人ならば力を盡し命を抛つてと努力するのは實にこの軍隊を休むる間にも尙我身の姿勢を整へ或ひは戦争の面影を偲ばしむるに供するものなりと。

次に第二中隊の宿舎に入りて内部の模様を見るに寢臺は七脚宛向ひ合ひて二列に並びて共に一線上に並ぶ。

一分の出入だになく。己にかかる整頓せるに驚きし眼を轉して架上を見るに襯衣等の箱の如くに各々整然と相置きたる驚の外云ふに辭なし。纏がて谷口氏の日々精しき説明あり。三〇年式及三八年式の銃等も一々分解していく懇ろに教へられたり。

次いで營倉、機械体操、雪中体操場、火薬庫と見廻り被服倉庫の内部を觀考す。襯衣、服、脊囊等所狭き迄に積み上げ床板は皆目貼りをなしナフタリンの臭氣を劈ぐばかり皆戰時に使用するものなりと。

炊事場及將校集會所を過ぎて病院を一圓す。病院は一

生活である。この軍人的精神を養成する軍隊的生活である。「兵營は艱苦を共にする爲の軍人の家庭なり」樂をする爲でない。苦を爲る爲に將校も兵卒も共に日夜努力するのである。諸君も希くば苦の考へを持つてこの兵營を參觀して貰いたい。かゝる嚴格な規則振つて誤れば一步も假借せぬ内にも和氣藹々春風の吹いて居る處をよく見届けて貰いたい。軍隊は前進主義を以て教育の方針として居るかくて戰場に出で退くを愧とし忠を盡し命を抛つて前進するから戦も勝てる。

其他軍隊には電線の教育もやる。通信の教育もやる。機關銃の教育もやる。馬の教育もやる。今迄實業に從事して居た壯丁を集め『氣を付け』の姿勢からこれ等に至る迄皆教授しなくちやならぬ。

新兵が入つて來たら如何に教授すべきや等は今頃から考へて居る。軍隊の方でも日々事務に忙しい。又日々事柄も變る。新兵教育法も近年變つて來た自分は毎日馬で一里半ばかり通つて居る。軍隊はこの通り仲々一

段高き所にあり樹木多く植はりて自然に公園の状なし寒氣清爽幽邃閑雅の趣あり後二三の建物を見終りて菊田旅館に投宿す。夜九時就床。(IK)

後編

第二日 十五日

實彈射撃及中隊教練見學

目を醒ませば四時頃電氣の光りのみ明らかに戸外は寂としてあたり暗澹たり。

ヤイ起きないかモー四時だよ

天氣はどうだ善いか？悪いか？

その面白いぞ晴天に見學するより雨天に見學すれば

石違つたものさ大和島根の赤心を著す眞髓こそ鬼をもひしぐ天晴もの我輩今日は命中さすのだ。

花に花が咲いて交換さるゝ會話は皆大氣焰殊に雨催を好むおのこの勇氣の凜々しさ薩摩隼人も何のものかは正義と勇氣と疑ひかこまる彦馬の建兒ぞ未だのもし。

かる程に嘶き勇ましく
切つて来る將校あり。

稍々して金山山嶺白むと見るや木も草も人も家もバノ
ラマの如く一瞬に入るくさゝゝ之れ活畫の如く豁然と

かる程に嘶き勇ましく部下數名を従へて英姿堂々風を
切つて來る將校あり。

大尉殿の講話の大要を記せば

六時と云ふに旅館菊田屋前の大通り整列し隊伍整然道を金山山下射的場にとる行程約半里。

暫くにして谷口少尉殿及秋篠見習士官殿等來られ懇勸なる地形の説明及射撃に於ける注意を承る。

かくて射撃に於ける準備は整ひ再び池田先生より委細の御注意を聞き我れ命中さして彦中健兒が本領顯さむと血潮は湧き腕はなる。

中には我れもし零の腰抜け者ならば武士の本領如何ぞ生きてはあるべきいでく潔く散る櫻花群衆の前にて見んごと散りなんと廣言吐きし勇猛の士も多かりし斯

ひ得ざる程なりき。
而して我等は谷口少尉殿池田先生成宮先生監督のもと
に射撃を始めたり天候曇風なし距離二百米其の成績左
の如し。

第一發を發射して生じたる瓦斯が直ちに活塞を循環して遊頭を押し又次にその生じたる瓦斯が又活塞に作用して順次發射するのである。

今機關銃の實彈射擊として諸君等の参考に供します此の機關銃彈射擊は此の聯隊の兵士にも未だ見ざる者すらありますわざく諸君等が、當兵營内に來られると云ふので百發程残して置きました。其の他委細の説明ありて實彈射擊ありたり。

先づ發射するや銃聲般々絶えもやらず霹靂晴天をかすめるが如し。

柴	小	大	衣	岩	藤	樋	神	澤	宮	山	珠
林	日	斐	崎	澤	口	口	純	尾	田	田	玖
吉	方	由	甲	徹	敏	權	一	源	信	信	義
一	榮	重	藏	眼	雄	八	三	郎	義	造	
一	郎	隆									
0	0	0	4	0	0	7	2	2	0	0	3
2	8	0	6	0	1	0	0	6	1	1	3
											伏射
6	6	0	0	0	0	8	4	6	0	0	4
0	5	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0
											膝射
0	6	2	9	0	2	0	0	0	5	3	0
0	1	0	0	0	0	0	6	0	8	0	0
8	26	2	8	0	3	14	12	15	14	4	10
30	3	48	8	52	45	20	23	14	17	42	26

七二

宇治原未造	村池正義	中村次郎	森池傳次郎	澤秀之	山田信太郎	苗村從次郎	横田貫一	竹内勝三	西村彦右衛門	古川與惣吉	西川龜次郎	朴武雄	後藤嘉夫	前川宗太郎	四郎
0 0 4 0 0 0 1 6 0 0 0 5 0 0 1 0 0 8 6 0 4	1 4 0 6 0 0 4 0 0 5 0 0 1 0 0 0 0 0 0 4														
0 0 5 4 0 4 6 0 5 7 0 0 1 0 8 5 5 1 2 0 4	0 5 1 7 0 0 5 7 0 8 4 0 0 0 5 5 1 2 0 4														
9 1 8 1 6 5 4 5 0 1 0 0 0 0 1 0 0 4 0 10	4 0 6 0 0 0 6 3 3 10 0 0 0 0 1 0 0 4 0 2														
5 13 24 18 6 9 26 21 36 5 1 8 11 14 12 22 24 26 24	4 1 25 27 37 27 27 46 5031 2918 29 18 12 22 24 26 24														
相大松木鹿内淺圓小森今安片桶口塩谷彰	場杉松木鹿内淺圓小森今安片桶口塩谷彰														
榮友山木鹿内淺圓小森今安片桶口塩谷彰	三七龍木鹿内淺圓小森今安片桶口塩谷彰														
3 2 0 0 0 5 0 0 3 1 0 6 0 0 0 0 0 3 0 0	0 0 1 0 5 7 0 5 0 0 0 2 0 0 0 0 0 0 0 0														
0 5 0 0 3 0 0 0 7 0 1 0 3 8 5 0 10 7 0 0	0 0 3 0 1 0 0 5 0 0 0 4 0 0 10 7 0 0 0														
6 0 1 0 1 0 0 0 0 0 0 1 0 0 3 0 0 0 0 0	0 0 0 0 0 2 0 0 5 0 0 0 1 0 2 0 0 0 0 0														
9 17 2 3 4 15 0 10 15 7 8 6 6 8 6 8 18 12 15 5 4	29 35 49 46 28 17 43 25 16 31 33 37 38 34 18 9 13 5 4														

項目は

劍道と學生

滋賀縣出身

要を記せば脇光造氏は十三年

大要を詰せば肱光造氏は十三年彦根間に產れ稚長するに及び東京に遊學の後北京に行き日本語學校を建設して校長となり、又北支那新聞記者の主筆となる三拾七年の戰役に際しては沖貞助、横川庄造等効名の志士と相はかりて我が皇國の爲めに殉するの志を起し二月十七日參謀本部と打合をなして暗黒に乘じ

續て秋篠見習士官殿の引率によりて掩壕を參觀し委細の説明を承る

、ハルの北ヤールホール鐵橋に着しシベリヤ大鐵橋の大破壊をせんとしむ時は晝なれば夜陰に乗じて破壊せんものと爆裂弾を携帶して後の小丘に姿をかくせり然るに運つたなく敵ゲジン中尉の發見する所となり百方計をつくして逃れんとすれど逃るゝを得ず